

ふれあい

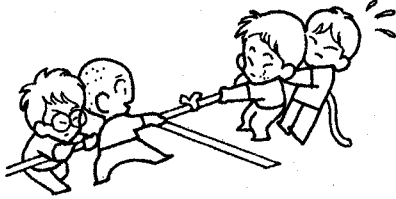
大代地区コミュニティ推進協議会

事務局；大代地区公民館 ☎ 364-8442

大代地区スポーツ大会を終えて

去る十月十日(日)緩衝緑地公園において開催した第六回大代地区スポーツ大会は、秋晴れの絶好の天気恵まれ、地区内から約二百五十名の参加をいただき、親睦を第一としながらお互い各競技に心地よい汗を流し熱戦が繰り広げられました。

今回の大会には、多賀城消防署と大代地区婦人防火クラブとが共催した水バケツリレーによる初期消火競技を加え、小学生のドッジボールとラケットベースボール、また一般のラケットベースボールではお父さん、お母さんの運動不足も重なり珍プレー・好プレーが出るなど和やかな風景でした。一方、このところ大代地区で人気の高いグラウンドゴルフには、老若男女を問わず手軽にできることもあり、多数の参加者でホールインワンも数回出るなどレベルの高さが伺われました。



スポーツ大会最終種目の地区対抗戦綱引き競技は、各地区一体となった熱い大声援に選手は励まされ、応援する側も手に汗を握るほどたいへん盛り上がりしました。大会終了後は、参加者全員にジュースとトン汁が振る舞われ、日頃なかなかお会いできない方々との交流を深め、盛会のうちに事故もなく終了しました。

御祝儀 お見舞いは

三千元を限度にお返し

物はしないようにお互

い気を配りましょう

最後に、各区長さんを始めご来賓、選手並びに応援に参加された皆様、そして大会開催のため早朝より準備にご協力いただきました皆様、厚く御礼申し上げます。

◇大会の結果は、次のとおりです。
総合優勝 大代南区(三連覇)
総合準優勝 大代中区(二連覇)

大代地区子ども会育成連合会
会長 平山 勇

初期消火技術大会を終る

スポーツ大会真盛りの体育の日に、当地区で行われた行事に初期消火操法として消火器操作と水バケツリレーを取り入れて頂きました。

当日、多賀城消防署の皆さんのご協力とご配慮のもと本番さながらの水バケツリレーで子供も大人も連携プレーよろしく競技に熱中しておりました。水バケツ消火は重要な初期消火であり、延焼を防ぐ力をもっています。

(私が過去に経験しております)
これからは空気が乾燥して一寸した不注意が火事の要因を作ってしまう。皆様のご家庭でも今一度点検を充分に行って頂ければと思います。
又、当日消火器と消火液の交換を幹旋致しましたが、都合で利用出来なかった方でご希望の方はご連絡下さい。
大代地区婦人防火クラブ

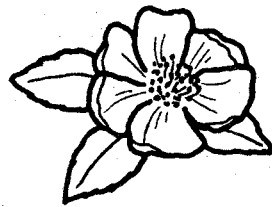
会長 後藤 重子
☎(三六二)三一〇六

きれいになった貞山運河周辺

去る十月三日(日)秋の貞山運河周辺の清掃を実施しました。五月の清掃は雨のため中止になりました。

今回は早朝より四十名の方々に参加協力して頂き有難うございました。又、車を出していただいた柴静夫様には心よりお礼申し上げます。来年も継続します。地区の皆様、ご協力の程よろしくお願い致します。

環境美化部長 荒木 慶蔵



男体山と奥白根山へ

関東地方へ豪雨をもたらした八月十三日から十五日まで、二泊三日の予定で日本百名山の一つ男体山(二三九七、七メートル)関東以北最高峰の奥白根山(二五七七、六メートル)に登るため、朝三時八人で車二台に分乗し中禅寺湖畔の二荒山神社登山口をめざし出発した。天気も良く早い時間でもあることから車は順調に走り予定どおり八時三十分に着いた。しかし、登山する頃には曇りから小雨と変わり雨具を着ての登りとなった。男体山は八合目までは樹林の中で風もなく、最初から厳しい急登の連続である。大分疲れながら

も四時間四十分をかけた頂上に着いた。その時は雨もあがってはいたがガスがかかっており、晴れていると中禅寺湖や奥白根山が見えるのに残念である。昼食後、運転手二人は車を回収するため往路を下り、縦走組は志津まで下って、志津小屋で落ち合う。今回は二泊とも湖畔のキャンプ場のパンガローを借りた。夕方四時三十分頃着いた時から雨が強く降り始め、食事を七時頃には強風とともに本降りとなる。翌十四日四時に起きたが風雨ともに強く登山は無理と判断、中止とする。キャンプ場に百組も張っていただろうテントは、雨のため夕方までにはほとんどの人達が撤収していた。私達は、狭いパンガローで一日中飲んだり食べたり寝たりで山を歩いているより疲れた。それにしても、よくこんなに降るものだと皆なもびっくりしていた。明日の天気を祈りつつ早めに眠りについた。十五日は四時に起きたが降りやまず、それでも準備をして奥白根山の登山口へ、五台程の車が様子を見て待機中であつたが、私達は、「行ける所まで行ってみよう」と雨具を着て六時二十分に出発。雨はやまず昨夜作ったおにぎりを立ちながら食べ歩いて、九時にガスを覆われた山頂に立つことができた。早めに往路を下り、疲れと冷えた体を湯元温泉でいやし、十二時過ぎ天気も回復、観光客の多い湖とも別れいろは坂を下って東北自動車道へ。そして無事十八時三十分多賀城に帰ることができた。家に帰って、川原でキャンプをしていた方々のいたましい災害をニュースで知った。昨年と同じ日に、五泊で北海道の羅臼岳と斜里岳それに黒岳に登った時も天気は良くなかった。来年は日を変えてみようか、又何所の山に登ろうか。

大代東区一住民

敗買 妻と 愚 妻

◎今から二千二百余年前、秦の国に野望を抱いている青年がいた。昨日も今日も、針の無い釣竿で釣をしていた。これを見た妻は、

「こんな馬鹿な男に嫁いだ私は間違っていた」

と云って離婚した。やがてこの青年は中国を統一し、「秦の始皇帝」と名乗った。これを聞いて離婚した妻が帰ってきて、

「私が間違っていた。元通り妻にして下さい」

と願いだした。しかし始皇帝は、「復水盆に帰らず」

と云って戸を閉めた。大器を見抜けなかった愚妻の例として、後世に残った。

◎徳川家臣の一人に山内一豊という武士がいた。特に才覚に恵まれた人物ではなかったが、忠誠心が強かった。それ故、仕事があまくゆかない時は、よくよして帰宅した。そんな時、妻は

「おまえ様、そんなに気にしなさんな、天下の家康様も三方ヶ原の合戦で敗北し、命からがら浜松城へ逃げ帰り、失敗を教訓として成長し、天下を取ったではありませんか。明日があります。さあさあ先ずはお風呂へどうぞ」

と云って夫を安らげ、勇氣と希望を与え、温かい言葉の中に武將として必要な資質を育てていった。ある日夫が帰宅し、しょんぼりしているの、妻に訊を聞かれた。そして

「名馬が売り出されているが、とても

高価で買えず、悔しい」

と言った。それを聞いた妻は算笥の奥から金子を取り出し、

「さあおまえ様、これでその名馬を買ってきなさい」

と云って手渡した。驚きと喜びとで涙をこぼしながら名馬を手にした。後に、この一件は藩内に広がり、武士の注目を集め、やがて家康公に認められ、一

国一城（現在の四国）の主に出世した。夫を城主に育てた賢妻「千代」の名は、四百年の時を越えて、今もなお人々に感銘を与え、消えることはありません。

(大代西 Y・F)



短歌

我庭の高き水木に蟬の来て

低く鳴きたり九月の朝を

本郷 貞子

真夜冴えて相田みつをの本を繰り

優しき言葉にいつしか眠る

跡辺 文江

秋来ると何か一つの幸をさがさんと

海を見に来たりけり



冬 春 夏 秋

平成十一年もあと二ヶ月となりました。この冬は暖冬の長期予報ですが、やはり何処かに寒さを期待する気持ちがないわけでもありません。

冬来たりなば春遠からじで、季節は確実に春を迎えるでしょう。春夏秋冬の言葉から受ける皆様の印象は如何なものでしょうか。春は全ての生物が生き生きと萌え出す季節、夏は陽の下で一斉に花を咲かせる季節、秋は実りを約束された季節、冬はやがて来る春の足元を期待して充電する季節ではないでしょうか。しかし自然界を見ますと、厳冬の庭先でサザンカが見事に花を咲かせております。また、海からはカニ、タラ、ノリ、カキ、コンブ等が成熟して人間に活力を与えております。季節毎に生きる定めを全ての生物がそれぞれに担い、そこで精一杯生きる姿は尊いものです。人間は、生を受けてから永遠の旅につくまで花を咲かせ、実を結びその実を次の世代に引き継いで行く過程で折々の季節感を覚えるのではないのでしょうか。従って、春、夏、秋、冬それぞれ自分の人生になぞらえ、悔いのない様毎日を精一杯生きることには最大の努力を払って生活をしているのではないのでしょうか。

私の一番好きな季節は秋です。やがて来る息吹を待つ冬の寒さ、春のやわらかい日差し、大地を潤す梅雨の雨、燦々輝き生物を大きく育てる夏の太陽、それぞれに育まれて秋には実りが約束されております。収穫は私にとって最高の喜びです。

大代中 小野 菊郎

連載読物

二代目花咲かじいさん「16」

若生一徳(大代西)

茂作じいさんは、二代目花咲かじいさんとして暮われ、日ましに多忙の身となりました。どの人にも礼をつくし親しみをこめ、とくに悩みごとの相談になると、茂作はひたすら相づちを打ち、やさしい思いやりにあふれて聞き入るのです。その人の言葉じりを捕えて説教じみるのではなく、善き心情への呼びかけ、天与の美点を浮き彫りにして、目指すべき方向へと押し上げる。その言葉は、この世を飾っている花々のように匂い立ちました。訪問客の身分や財産に眩惑されることなく、その人の真心、明るさ、こだわりのなさ、辛抱づよさを、そして愚痴をこぼさない、事を荒立てない、陰口や弱音を吐かない特質を称えられ、前途を祝福、期待されました。お世辞とは違う心底からの訴えでもありましたから、枯木に花を咲かせた奇跡の灰と同じ効果をもたらしたのででしょうか。どの人も茂作じいさんの前に座る前と後とは、まるで埃まみれの宝石が本来の光をとりもどしたかのように、その人の個性が花ひらいて輝いたのであります。

小鳥の妙音と芳香については、技巧を必要としません。話す人と聞く人とが渾然一体、にこにこにっこりひとつに溶け合った瞬間、ひとりでにうつつと発生するのであります。(続く)